

もう30年近くも前のことになる。当時  
もいまも東京に出張すると、帰路の新幹  
線用に東京駅近くの丸善で本を買い、そ  
れを読みつつ京都に帰るのが習慣である。  
その時も丸善で文庫本を1冊購入し、新  
幹線に乗った。書棚の前に平積みになっ  
ていた新刊本の1冊だった。

その時に手にとったのはリチャード・  
ハトレイの小説『流刑地サートからの脱  
出』（新潮文庫）だった。

近未来のイギリスの物語である。主人  
公アンソニー・ラウトリッジは設計積算  
を生業とするごく平凡な小市民だ。その  
彼が身に覚えのない強姦殺人の罪で終身  
刑を言い渡され、孤島の流刑地に放り込  
まれる。そこは大西洋に孤立する島で、  
矯正も更生も全く不可能と判断された囚  
人たちを生涯收容する世間から隔絶した  
流刑地だった。作品では、主人公の絶望  
から自立への歩み、極限状態においても  
困難に立ち向かい希望を見いだす姿が感

## 本を読み音楽を聴く 人間の声



動的に描かれる。長く品切れになってい  
ることが惜しまれる作品である。

しかし、本稿で小説の筋を紹介したい  
のではない。作品中に出てくるフレーズ  
を紹介したいのだ。30年間私の心から離  
れないフレーズである。

物語の冒頭、主人公アンソニーは流刑  
地に放り込まれた直後にある囚人と出会  
う。彼はアンソニーが流刑地で最初に出  
会う人間だ。流刑地の住人なのだからも  
ちろん凶悪な罪を犯し矯正不可能と判断  
された囚人の一人である。

二言三言ことばを交わす中でアンソ  
ニーはこう感じる。吉浦澄子さんの訳で  
紹介する。

「男の声には教養が感じられた。本を読  
み、音楽に耳を傾ける人間の声だ。」

原文では、*The man's voice was cultured,  
the voice of someone who had read books  
and listened to music...* となっている。  
もしかすると原文のほうが、読書を積み

重ね、音楽を聴き込んできた人物の姿がより伝わりやすいかもしれない。

声から教養が窺い知れる。声に教養、そしてその結実である人格が反映する。その象徴が読書であり音楽だというのだ。

このフレーズに出会い、私もこのような声を持つ人間になりたいと痛切に思った。本を読み続ける人間、音楽を聴く人間になりたいと思った。そのような本や音楽に接する努力を続けられる人間でありたいと思った。また、大学の一人として、私が出会うであろう学生たち一人一人にこのような声を身に付けさせたいと心の底から思った。

時が経ち、若手教員だった私も歳を重ね、そのうちに教務部長や副学長などの役職に就く機会も与えられた。それぞれの職務を追求する上でこのフレーズはいつも心の拠所となってきた。

大学教育の課題や大学人の責任については多様に論じることができるだろう。

## 梅本 裕 ● 京都橘学園理事長

私自身は、少なくとも学部教育においては「難しい本が読める学生を育てる」ことが最も単純で分かりやすい目標だと考えてきた。

〈難しい本〉とはもちろん比喩でもある。家族や親友の範囲を越えて、他者と対話的な関係を築くためには、自分とは違う世界に生きる人間への想像力が必要になる。この想像力を培うには人間と社会への深い理解が不可欠である。理解は読書によってこそ安定して形成されると私は信じている。

そして、その理解に彩りと柔軟さを添えるのが音楽だろう。小説家ロビン・ホワイ特が言うように、メンデルスゾーンに希望を、エルガトに絶望を、そしてシベリウスにかすかな狂気を聴き取る耳を持つ学生が私たちのキャンパスから育つことを心から期待する日々である。